

高津おはなしアーカイブ

渡邊貞雄（わたなべ さだお）さん
昭和9年生まれ 82歳
川崎市高津区明津在住



◆祖父が井田から

高津区明津に5人兄弟の次男に生まれました。兄は19歳で亡くなり、姉2人と妹です。

祖父が中原区の井田からここにきて、父は養子で、優しい父であり怒られた記憶はありませんね。母は、しっかり者でよくわかっている人でした。

◆用水の下（しも）の苦勞

このあたりは、昭和20年代後半までは、田んぼが広がっていて、うちも農家で、今も畑作は続けています。

田んぼには水が必要で、久地に「水ばかり（円筒分水）」があって、そこから用水が引かれていて、最後は矢上川に抜けていました。明津は用水の下（しも）の方だったので、上（かみ）の人に面倒をみてもらわなくてはいけない、親は水のことでは、相当の苦勞があったようです。

◆遊ぶより家の手伝い

小学校は、千年の橘小学校に通いました。今と同じ場所にあって、子どもの足で20～30分はかかったかな。ズック靴に半ズボン姿で、橘というと千年からこっちで範囲が広く、このあたりはみんな橘小学校に通いました。1クラス30人、男女半々くらいでした。

私は身体が大きい方だったので、運動会の騎馬戦では、リーダーでした。明津は千年、久末とは離れた小さな集落で、子どもも3人くらいで少なかったので、遊びの記憶はメンコをやったくらいであまりありません。家の手伝いはよくやりました。

◆小学校へは集団登校

朝は集団登校で田んぼの用水路に沿った道を歩いて行きました。学校にはお弁当を持って行きましたね。麦ごはんは梅干しで、魚や肉がおかずに入っていた記憶はあまりないですね。時代が時代でしたから。

橘小学校に通っていた子どもは、中学校は橘、高津、西中原中学校などといくつかに分かれました。明津は、西中原中学校で、今の戸小学校のところにありました。新制中学校への移行期で、入ったらすぐに卒業になりました。時代が時代でしたからね。私の世代は学徒動員には行っていないです。

◆空襲警報のサイレン

小学校に通っている頃、空襲がたびたびくるようになりました。このあたりは平地なので、防空壕を背の高さくらいま

でタテに穴を掘って、入り口は竹を渡して、その上に土をかぶせていました。

空襲警報はサイレンの音が違って、空襲のサイレンが鳴ると、すぐに下校になりました。子ども心には「家に帰れる」という気持ちの方が強かったですね。午前中の早い時間に空襲のサイレンが鳴り、下校。家に帰り空襲警報が解除になってもまた学校に行くなんてことはなかったですから。下校途中に空襲のサイレンが鳴るととにかく近くにある防空壕にどこでも入っていました。

高い空の上を飛ぶB29は小さく見えたけど、船で運ばれてくる戦闘機を地上で見た時があって、それは大きかったです。

明津は当時10数件、そのうち1軒が空襲で焼けました。うちのまわりにも六角爆弾(焼夷弾)が落ちました。爆弾は、投下されて途中までは1つで、空中で爆発して、束のようなものがバラバラになって落ちてきました。生ゴムみたいな糊のようなものでそれがあちこちで燃え出して、親たちは火を消そうとしていたけど結局は逃げるしかなかった…。この時のことは忘れられないです。

蟹ヶ谷の方に海軍省があつて海軍の兵隊さんがいました。空襲がない時にそこを見にいつて遊んだりもしました。あれがあつたから狙われたんでしょうね。陸軍の兵隊さんもいました。

◆日常の暮らしは井田へ

子どもの頃は、みそ、醤油は家で作っていました。最初にみそを仕込んで、みそ麴から時間をかけて醤油に。井田の醬

油しぼりさんが家に来てくれて、みそを仕込んだ四斗樽に水分を加えて醤油を仕込んでくれました。

お酒は井田の「長塚屋さん」がありました。肉はあまり口にした記憶はないです。口に入るものは何でも…という時代でした。肉なんかなかったですね。

買い物は、親がほとんどしていて、店がある井田、元住吉へ歩いて行ってましたね。元住吉は大きな商店街があつて、今の雰囲気でした。電車に乗る時は武蔵中原か、元住吉、武蔵小杉まで歩いて行ってそこから乗っていきました。バスは通っていたようですが、乗った記憶はないですね。

◆盛大な橘樹神社でのお祭り

明津のお祭りは近くの熊野神社でした。坂の上にある大きな橘樹神社で蟹ヶ谷、子母口と明津も一緒にやらせてもらえたお祭りは、とても思い出深いです。素人の芝居小屋がかかったりして、人もたくさん集まってにぎやかでとても楽しかったです。

◆地域で助けあう農の暮らし

我が家は、戦前までは麦・米など穀物中心の農家でした。下小田中に親戚がいて、一頭の牛を共有して、1週間交替で牛を連れて丸子橋を渡り、田園調布までくみ取りに行ったりもしました。

戦後、農業の機械化が急速に進む中で、1台の機械を何軒かで購入して共有しあう、何事も助け合いながら農業を続けてきました。先祖が耕してきた田んぼは時代の流れの中で昭和20年代後半くらい

から宅地にし、今は、畑作のみの農家です。そういう時代だった…その中での選択だったと思っています。

収穫した野菜は、川崎駅近くの八百屋が集まる中央青果市場まで、中古のオート三輪で出荷に行っていました。うちは農地を地続きで所有していたのでここまで農業を続けてこられたと思っています。

今も年間通して数種類の野菜を栽培し、軒先で直売しています。朝、起きるとまずは畑に足が向きます。作りたての野菜はおいしいし、安心。だから今も農業を続けています。

(平成28年7月14日取材)